

引用文法史料略註

〔一〕奈良朝時代

古事記 和銅五年（一三七二）太安萬侶撰

日本書紀 養老四年（一三八〇）舍人親王、太安萬侶等撰

延喜式祝詞 祭祀の詞であるから、原形は古く成立したもので、延喜式（延長五年）に收められるまでに、

變化改刪を蒙つたに違ひないが、宣長の云つた通り、大寶令の頃か、又はそれより以前、天智文武兩朝頃に大體は固定したものと見てよからう。

佛足石歌 佛足石落慶直後と思はれるから、天平勝寶四年（一四二二）の作だらう。

萬葉集 天平寶字三年（一四一九）頃にほど成立し、平安朝に至るまで後人の補修が加り、現存の形になつたのは、平城天皇の御代か（久松潜一氏説）。

續紀宣命 文武天皇元年（一三五七）即位の詔から、桓武天皇延暦八年（一四四九）の詔まで六十二詔。

日本靈異記 弘仁頃の成立だが、傳説と共に歌は奈良朝時代のものである。

(二) 平安朝時代

神樂歌 奈良朝末より平安朝初に作られたものが多く、之に整理を加へたのは、清和天皇の御代から圓融花

山兩朝頃までの間で、最後に源雅信(一五七九—一六五三)が大修正を施したと云ふ。

催馬樂歌 大部分地方の民謡若しくは童謡で、神樂歌と同じく、奈良朝末から平安朝初期に出来たもの。弘

仁(一四七〇—一四八三)前後から、貴族の間に遊宴の餘興として謡はれるものとなつた。

竹取物語 藤岡作太郎氏の説の如く、貞觀から延喜(一五一九—一五八二)の間の作と見てよからう。

伊勢物語 在原業平の歿(元慶四年、一五四〇)後、間もなく出来たもの。但し現存の形を具へたのは、延喜

前後と云はれる。

大和物語 天曆年中(一六〇七—一六一六)成立。

新選字鏡 昌泰年中(一五五八—一五六〇)昌佳撰。抄本と完本とある。享和三年の刊本は抄本。本文一冊校

異一冊ある。完本は天治年中書寫のもの、全部十二卷ある。

古今和歌集 延喜五年(一五六五)紀貫之等撰進。但し延喜七年頃の歌があるから、奏覽はそれ以後と云ふ

説がある。

和名類聚集(和名抄) 醍醐天皇の皇女勤子内親王の仰せにより、朱雀天皇の承平年中(一五九一—一五九

七)源順撰。

土佐日記 承平五年(一五九五)紀貫之が土佐守の任果て、海路京に上る時の日記。

後撰集 天曆五年(一六一一)撰進。

蜻蛉日記 天曆八年(一六一四)から天延二年(一六三四)までの日記。

宇津保物語 圓融花山二帝頃(一六三〇—一六四六)の作と云ふ説があるが、異説もある。

落窪物語 圓融花山兩朝ごろの作であらう。

古今六帖 眞淵は古今集以前の成立と考へたが、後撰以後拾遺以前の成立とする契沖の説を取るべきであらう。

拾遺和歌集 八雲御抄には、長徳(一六五五—一六五八)頃の成立とし、保己一は長保三年(一六六一)とする。

和泉式部日記 長保五年(一六六三)から、同六年(一六六四)までの日記。

枕草子 寛和二年(一六四六)と思はれる記事が最初で、長保二年(一六六〇)と思はれる記事が最後であるから、その以後に完成したものだらう。

源氏物語 寛弘五年（一六六八）に、一部は出来てゐたことが明かだが、その完成はいつか分らない。

紫式部日記 寛弘五年（一六六八）から、同七年（一六七〇）までの日記。

狭衣物語 藤岡作太郎氏は、永承、天喜頃（一七〇六—一七一七）の作とし、津田左右吉氏は、白河院御在位

（一七三三—一七四六）頃の作とする。

更級日記 寛仁四年（一六八〇）より、康平二年（一七一九）と思はれるまでの日記。康平二年以後一二年の間に追記したもの。

〔三〕 院政鎌倉時代

今昔物語 宇治大納言源隆國（一六六四—一七三七）の作と云はれる。

榮華物語 堀河天皇の御世（一七四七—一七六七）に出来たもの。但し上篇は長元二年（一六八九）—同六年（一六九三）に出来たと云ふ和田英松氏の説がある。

大鏡 作者は萬壽二年の作のやうに装つてゐるが、白河天皇（御在位一七三三—一七四六）以後の作である。

法華修法一百坐聞書抄 天仁三年（一七七〇）に行はれた百坐の法華修法會の説經を筆記したもの。現存の

法隆寺所藏のものは、後の抄出にかゝるが、天仁を去る遠くない頃のもの。

讃岐典侍日記 喜承二年（一七六七）から、天仁元年（一七六八）まで前後二年間の日記。

類聚名義抄 菅原是善撰と云はれたのは誤で、この時代のものに違ひない。山田孝雄氏は「後一條天皇頃から堀河天皇の頃までの間に出来た」と云はれる。

童蒙頌韻 天仁二年（一七六九）三善爲康撰。

色葉字類抄 橘忠兼撰 二卷本、三卷本、十卷本の三種がある。天養より長寛頃（一八〇四—一八二四）までに作つたものが二卷本で、もつとも古いもの。三卷本は之れを増補して治承頃に出来た。三種の傳本中もつとも重要なもの。前田家所藏のものは中巻が缺けてゐるが、撰者の時代に近い頃の書寫で傳本中最も古い。黒川家所藏本は三卷揃つてゐるが、後世の書寫にかゝる。十卷本は鎌倉時代に何人か増補したもの。

梁塵秘抄 後白河天皇（御在位一八一七—一八一八）の御撰。

とりかへばや物語 原作は院政時代で、鎌倉時代初期に改竄されたものであらう。

山家集 西行（一七七八—一八五〇）の歌集。成立の年時は未詳。

寶物集 平康頼撰。成立は異説があるが、治承二・三年頃（一八三八、九）であらう。

千載和歌集 序文によれば、文治三年（一八四七）成立。

古今集註 顯昭撰、壽永二年（一八四三）頃より起筆し、建久二年（一八五一）完成。

後鳥羽院御百首 正治二年（一八六〇）御撰。

千五百番歌合 建仁元年（一八六一）後鳥羽院以下當代の名匠三十家の作。

新古今和歌集 建仁元年撰進の院宣下り、元久二年（一八六五）に成立。その後しばらく切繼が行はれた。

宇治拾遺物語 成立は建保年間（一八七三—一八七八）と云はれる。

平家物語 建久以後承久二年（一八八〇）成立と云ふ説に従ふがよからうが、異本が非常に多い。現存異本中

最古のものは延慶本。

源平盛衰記 平家物語の異本の一つと見るべきもの。

保元物語 原作の成立は、平家物語と相前後して居るが、流布本には後の増補が加つてゐる。

平治物語 保元物語と同一作者の手に成ると見られてゐる。流布本には、保元物語と同様、増補が加つてゐる。

建暦御記（禁秘抄） 室町時代以後禁秘抄の名に定まる。書名は建暦帝記と云ふほどの意味で、成立年代をあらはすのでなく、建保六年（一八七八）御起稿、承久三年（一八八一）御脱稿と見られる。

字鏡集 菅原爲長（一八一八—一九〇六）の撰。

萬代和歌集 寶治二年（一九〇八）撰。勅撰集に見える歌も見えるが、主として鎌倉時代の人々の作。私撰類

題和歌集の先驅。

親鸞消息 親鸞は承安三年（一八三三）に生れ、弘長三年（一九二二）歿。

吾妻鏡 治承四年（一八四〇）頼朝舉兵から、文永三年（一九二六）惟康親王が將軍に擁立されるまで凡そ八十七年間に互る鎌倉幕府の日記體の記錄。

開目抄 文永九年（一九三二）日蓮撰。

沙石集 弘安二年に書き始め、弘安六年（一九四二）に書き終へてゐるが、永仁三年、徳治三年等の加筆がある。

中務内侍日記 伏見天皇に仕へた中務内侍の日記で、後宇多院の弘安三年（一九四〇）に始り、伏見天皇の

正應五年（一九五二）に終つてゐる。後年追憶して、書き加へた所もあると云ふ説（池田龜鑑氏）がある。

夫木和歌抄 著者藤原長清は冷泉爲相（一九二三—一九八八）に學んだ人だから、伏見天皇の朝又は之を距る遠からざる頃出來たものだらう。

假名がき論語 元弘三年（一九九三）成立と云はれる。

増鏡 建武中興（一九九四）後、間もなく出來たものと云ふ伴信友の説に従ふ。

〔四〕室町時代

平他字類抄 元中（二〇四四—二〇四六）頃の撰。

義經記 成立については定説がないが、室町時代の初期から中期までの間であらう。

今川大双紙 今川了俊（一九八五—二〇八〇）の撰。

謠曲 今に存するもの約五百番。内百番が最もよく行なれ、之に次ぐ外百番の他に、番外百番、續番外百番、續々番外百番等がある。應永（二〇五四—二〇八七）頃から豊臣氏の時代にかけて作られたもの。

勅規桃源抄 雲章（二〇四六—二二二三）の講義を瑞仙桃源（二〇九〇—二二四九）が筆記したもの、寛正三年（二二二二）完成。百丈清規抄と題した本もある。

史記抄 前記桃源の抄。

蒙求抄 享祿二年（二二八九）の抄。

湯山千句 明應九年（二二六〇）桃源の弟子周鱗（景徐）の抄したもの、寛永七年刊。

四河入海 笑雲清三抄。大永七年（二二八七）始筆、天文三年（二二九四）絶筆。

山谷詩抄 林宗二（二二五八—二三四一）の抄。各卷に奥書がある。例、永祿九年（二二六九）丙寅七月十五日申刻抄之。宗

二六十九歳(十九卷末)。

古文眞寶抄 此抄者一元和尚就桂林和尚聽之聽書也の奥書があり、永正十五年戊寅(二七八)の抄。

三體詩絶句抄 元和六年刊。

古文眞寶之抄 桂林徳昌、萬里周九、一元、湖月信鏡の手抄を笑雲清三が集大成したもの。大永五年(二二

八五)の奥書がある。

中華若木詩抄 月舟の弟子如月壽印の抄。

碧巖抄 寛永十八年刊。

莊子抄 正保二年刊。卷三の文中に「サツクルトヨムト萬里ノ云レタソ」とあるから、成立は他の抄と同じ頃であらう。

三體詩法三體家法 紫陽素隱の鈔、寛永十四年刊。

錦繡段抄 月舟壽桂(二二〇三歿)の抄。

宗門葛藤集(句雙葛藤鈔) 元禄五年刊。

閑吟集 永正十五年(二七八)に出来たもの。連歌師柴屋軒宗長を編者とする説(志田延義氏)がある。中流以下に行はれた作り歌及び民謡三百餘首を集めてある。

狂言記 もと口傳によつて傳つたもので、萬治三年以後版になつた。今日傳るもの、繪入狂言記(萬治三年刊、寛文三年再版)、同(寛文五年刊)、新板繪入狂言記外五十番(元祿十三年刊)、繪入狂言記拾遺(享保十五年刊)等がある。これらは自然、改作を経た疑があるが、淨瑠璃が成立當時の語法であると同様、室町時代の用語をあまり變へてゐないであらう。

天正日記 内藤清成(徳川氏の臣)の天正十八年の日記、慶長の殘闕が少し添へられてゐる。

天草本平家物語 實の名は、Nifon no cotoba to historia no narai xiran to fossuru fito no tameni xeuu ni yavaragetaru Feige no monogatari 文祿二年(一一五三)天草出版。

天草本伊曾保物語 (Esopo no Fabulas) 同。

ロードリゲース日本語典 (João Rodrigues, Arte da lingua de Japan) 慶長九年(一一六四)長崎出版。

〔五〕江戸時代

おあんものがたり 石田三成に仕へた山田去暦と云ふ者の娘が、慶長五年の亂に、大垣城に立籠つたときの話を口語體で書いたもの。

醒醉笑 安樂施策傳が幼時より聞いた笑話を、元和九年七十歳のとき書き記したもの。

きのふはけふの物語 慶長末の記事がある。その頃の成立。元和から寛永初年頃刊行。

雑兵物語 雑兵の説話に托して、故ら俚言を以て書いたもの。松平信興（二二八九—二三五一）の撰。

武道達者 元禄六年（二三五三）、京都都萬太夫座興行歌舞伎狂言本。

萬歳丸 元禄七年興行同狂言本。

日本月蓋長者 同狂言本、武道達者と同じ頃のもの。

兵根元曾我 元禄十年（二三五七）江戸中村坐興行歌舞伎狂言本。

京ひながた 元禄十二年（二三五九）京都龜屋座興行歌舞伎狂言本。

一心女雷師 同年江戸山村座興行歌舞伎狂言本。

成田山分身不動 元禄十六年（二三六三）江戸森田座興行同。

傾城角田川 寶永元年（二三六四）山村座興行同。

傾城曉の鐘 同五年（二三六八）京都龜屋座興行同。

八景聞取法問 滑稽本。寶曆四年（二四一四）刊。梅牆撰。

太平樂卷物 洒落本。平賀源内（二四三九歿）撰。

品川楊枝 同。寛政十一年（二四五九）刊。芝菅交撰。

東海道中膝栗毛 享和二年（二四六一）に初篇を出し、文化六年（二四六九）までに八篇を出して、發端一篇を文化十一年に作る。

浮世風呂 前篇二冊は文化五年（二四六〇）脱稿、翌年刊。二篇は文化七年（二四七〇）、三篇四篇は同九年（二四七一）刊。

浮世床 初篇は文化八年（二四七一）の自序あり。二篇の序は同九年。三篇は文政六年（二四八三）に出來た。

花暦八笑人 瀧亭鯉丈撰。初篇文政三年、二篇四年、三篇同追加は不明、四篇同追加は天保五年（二四九四）に出來、未完であつたが、一筆庵等が嘉永二年（二五〇九）に五篇を出して完結。